

セーリング競技におけるインカレの戦い方

How to challenge for victory in the all-Japan intercollegiate of sailing game

1K07A193-5 古谷信玄

指導教員 主査 太田 章 先生 副査 近江 幸治 先生

【序論】

セーリング競技とは、風の力を受け、その力で前へ進み、あらかじめ海上に用意されたコースを一斉にスタートし、ゴールした時の着順で競われる。

1 レースあたりだいたい1時間程度で、1日に複数レースが行われる。たいていの場合1日中海の上で過ごし、それが2日、3日と続くため精神的面も、身体的面も必要とされる。セーリング競技では、風や潮、波といった自然を相手とするため、さまざまな変化に対応できなければ勝つ事は出来ない。インカレの試合に関しては、艇種が470級とスナイプ級の、どちらも2人乗りの艇が採用されていて、それを各クラス3艇の計6艇の合計点で競われる。

早稲田大学ヨット部は2007年まで53年間もの間、優勝経験がなく低迷していた時期もあった。しかし近年全日本インカレで2008年・2009年・2010年と総合三連覇している。その要因を、洗い出し検討した。

【方法】

セーリングにおける強さとは、船を操舵するハンドリングといわれる技術、身体能力の高さ、ポジショニングやスタートダッシュなどのスタート力、その海面の特徴、その日の海のコンディションに合った船自体の性能を引き出すセッティング力、その海面・地形の特徴、その日の天候のコンディションを理解し、風の変化を読む予測力、戦うべき相手を理解し、相手に負けない走りをするタクティクスやストラテジー（戦術・戦略）、それらをまとめて、現状がどういう状態なのかを理解する分析力の7つが重要となり、それぞれがどの程度インカレの戦いにおいて重要なのかを考え、実際の2007年から2010年までの事例に合わせていき、個人成績の比較・2007年とそれ以降の比較・2008年、2009年、2010年の比較からインカレでの戦い方を見ていく。

【結果】

個人だけの成績を全日本個人戦の結果から比較したところ、ダントツで2007年のチームが速いことが分かった。その要因はセーリングにおける強さで挙げた、船を操舵するハンドリングといわれる技術、身体能力の高さ、

ポジショニングやスタートダッシュなどのスタート力、その海面の特徴、その日の海のコンディションに合った船自体の性能を引き出すセッティング力が大きなファクターを占めていて、2007年のチームはその点に関してはとてもレベルの高い選手がそろっていたと言える。それにも関わらず2007年は全日本インカレで大敗を期した。戦力が大幅に下がった翌年2008年以降、注意を向けたポイントは、海面・地形の特徴、その日の天候のコンディションを理解し、風の変化を読む予測力

戦うべき相手を理解し、相手に負けない走りをするタクティクスやストラテジー（戦術・戦略）、それらをまとめて、現状がどういう状態なのかを理解する分析力の部分に於いての強化であった。そして、優勝した年からの各年の違いは海面・地形の特徴、その日の天候のコンディションを理解し、風の変化を読む予測力、戦うべき相手を理解し、相手に負けない走りをするタクティクスやストラテジー（戦術・戦略）、それらをまとめて、現状がどういう状態なのかを理解する分析力、これらのことが2008年では口頭で部員に浸透させ、2009年には見える化、2010年には解析力のスピードアップに努め年々良い形になってきている。

【考察】

全日本インカレで勝てるようになり、その要因がレースメンバー以外の組織がしっかりしているかどうかのカギを握っていることがわかった。考えてみると、強豪といわれる大学はサポートメンバーの質も高く、その上OBやコーチ。監督などの部を取り巻く環境も整っている。しかし、現状に満足していたのでは、他の大学も勝つために必死こいて考え、努力し成長してくる。その中でやらなくてはいけないのは更なる探究、そして行動であるのだと考える。